

卷頭論文

個性的な地域社会の形成

住民と自治体が共同してつくりあげる多様な個性ある地域は、街とそこに住む人々を生き生きとさせる。



法政大学教授

田村 明

二 豊かさとは地域の個性

人間にとって、いくらお金を沢山持ち、贅沢にしても、外側から画一的な枠にはめこまれ、型にはまった行動しかできず、自分の個性が実現できないで他動的な生活をしているのでは、豊かな生活とはいえないだろう。本当の豊かさとは、精一杯個性を伸ばし、自分でも納得のゆく人生を送ることである。それは、やがては他にも認められる。

地域社会も人間と似ている。豊かな地域社会とは、個性のない画一的な人真似をしたり、他から押しつけられたものにするのではなく、地域社会のもつさまざまな可能性を生かし、自発性を持って個性ある社会にしてゆくことである。個性のある地域社会は、他から見ても魅力的なものに感じられるだろうし、その地

域社会に住む住民にとって、誇りと愛情をもてるだろう。

これまでの近代化や高度成長の過程の中では、こうした本当の豊かさが忘れられ、他の地域との同一性や外形的な豊かさだけを追ってきた。その中で、地域社会の自発性や個性が消されてしまってきた。自らが豊かになることを犠牲にして、あくせと働き、海外への輸出を伸ばしていった結果、貿易摩擦という結果を招いてしまった。各地域は、もつと本当の豊かさを求め、充実した地域社会を造ってゆくべきなのである。その方が、闇雲に輸出振興を図るよりも、内需拡大によって、自らも豊かになり、外国からも拒絶されることが少なくなる。

遅まきながら、これからでも、各地域社会の個性を伸ばし、個性と魅力ある地域を数多く創りあげてゆくべきであろう。平均的画一主義は効率性という面からみれば有効かもしれない。個性を伸ばすことは必ずしも効率的ではない。だが、長期的な視点に立てば、日本国中を同じよ

効率性というのは、短期間の目先だけの価値である。それよりも、多様な個性ある地域が多数存在することは、日本列島を変化に対応できるものとし、蓄積としてははるかに大きい充実したものにする。目先の効率ではなく、本当の豊かさと蓄積を求めると、地域の個性づくりである。

二 地域への評価と反省

それでは、どうすれば個性的な地域社会をつくることができるだろうか。それにはまず、次の二点から始めるべきであろう。

第一は、自分たちの地域社会を十分に認識し可能性を評価することである。地域の中に埋没しすぎると、案外に自分たちのもっている良い点を見すごしてしまふことがある。そこで、他に学び、また外の人々に指摘してもらおうのもよい。伸ばしてゆく萌芽はいくらもある。かつて、古くさいと評価もされなかった昔の宿場

も、見直し評価すべきものを認識することが必要である。

第二には、これまでの地域づくりについての反省を行うことである。多くは依存的で自発性が足りなかった。その結果、中央に頼り、他に追随し、他動的になり、画一的な地域をつくってしまった。また、行政のタテ割りで固定的な法令万能主義も、地域の可能性を押えてしまった。市民側もまた、行政に依存し、地域社会づくりに無関心であった。このように、行政や市民の問題、さらには現行の制度や仕組みについても反省を加えておく必要がある。

評価と反省の両者は車の両輪である。新しい可能性を見つけだしても、現在の方法を反省し、その正が行われなければ、可能性を生かすことはできない。また逆に、反省だけを行っても、現状の問題点に対する評論だけに終わってしまい、地域に則した創造活動へとつながってゆかない。



二 具体的行動と人づくり

可能性の発見や再評価と、問題点への反省は、スタート台にすぎない。そこから地域社会形成へと実際にスタートしなければならぬ。それにはまず具体的行動である。

行動といっても、いきなり物をつくるということではない。広く皆で、個人的な地域づくりを行うための勉強会や集会を開き、関心を広めることもいいだろう。祭りやイベントをおこなすことで、多くの人々が、連帯性や地域についての人々の認識を高めることもある。

地域社会を構成するのも、これをつくってゆくのも、結局そこに住む多くの人々である。この人々が地域づくりに関心をもち、自らも参加し、行動し、そこに連帯を生みだすことが必要である。地域に対する愛情と地域づくりへの熱意のある自発性をもつ人々を発掘し、育ててゆくことが基本である。地域づくりは人づくりだともいわれる。

人づくりとは、上からの教育だけでできるものではない。何かの具体的行動の造行動に向えるかどうかのカギである。個性的な地域社会は、多くの人々の手になる共同作品なのであって、一人の権力者の手によるものではない。

しかし、多くの人々の手にまかせていただだけではバラバラになりかねない。そこで、住民の連帯をサポートし、あるいは住民の意向をくみとって、必要な手段をうってゆくのが自治体の役割である。これまでの自治体は、定型的な法令を執行する「お上」の代理人というところがあつた。しかし、本来の住民自治の立場に立てば、自治体は、住民の力を引き出し、サポートする地域の事務局的存在であるべきだろう。

自治体行政は、市民の側に立った開かれたものであるならば、当然にタテ割り化している行政内部についても、またまった行動ができるヨコ割りの総合システムにしなればならない。行政がバラバラな行動をするのでは、とてもトータル

中で、参加し、体験する中から、人は成長し、意欲をもつ。人間の中には、可能性がありながらチャンスがないままに、日常生活の中に埋没し意欲を失ってしまふことも多い。具体的な行動は、人々に刺激を与え、人々を発掘し、集め、その人々に連帯感をもたせるさまざまな集会やイベントも、外形上の目的だけでなく、人づくりに役立つものとして働くときに意味がある。

高山や長崎の中島川では、まず川を清掃するところから人々の町への関心が高まり、意欲が生れ、さらにイベントをおこし、より具体的な地域づくりへと発展していった。岩手県の遠野では、役所の若い職員に火をつけ、ヤル気をおこさせた工藤市長の力によって、トオノビアという理念が生れ、それがさらに人々に輪を広げ、具体的な地域づくりへと発展していった。

私自身も、横浜市の中で、六大事業という戦略的ビックプロジェクトやアーバンデザインという新しい都市空間をつくる手法を行うことにより、多くの人々を発掘し、具体的な仕事の中で成長し、意

欲をもって行動する人々を引き出していった経験がある。具体的な仕事や行動こそが人を育てる。

二 トータルで市民的な自治体

個性的な地域づくりとは、こうした内発性のある人々によってこそつくりだされる。外形的なものをうのみに踏襲することからではない。個性的な地域とは、外側の姿よりも、それをつくりだしてゆくプロセスが重要なのである。

個性的な地域をつくりだしてゆくプロセスには、意欲のある幅広い視点をもつた人々と、この人々が互いの力を十分出しあい協力できるシステムが重要である。せっかくな意欲があり能力がある人々も、互いに力を消しあつてしまえば何もならない。

個性的な地域をつくるのは、未来へ向けての創造的作業である。それには多くの異なる人々の協力できあがる。地域はひとつのトータルな存在である。そこに多様な多くの人々が生活するが、互いに他と協力しあいながら、トータルな創

二 住民の役割

自治体行政の体質も、市民的で総合的で創造的なものにしてゆかなければならないが、住民もまた地域社会づくりへのかかわりをもたなければならぬ。行政がやってくれるだろうと期待をするだけではなく、自らも関心をもち、必要により、できる行動をするようであればならない。

それには、日常の場で市民が参加し、あるいは地域社会について開かれた議論をする必要がある。パリのボンビドーセーターは、多くの市民が議論したし、市場(レ・アル)の移転、撤去にも長い市民の議論があつた。全部の人々の意見が同じになることはないが、違った意見が自由に出しあい、異なる意見を理解しあえることが必要である。すでに各地で、住民の立場からする多くの町づくり運動もおきつつあるし、自治体行政と連携し

源が最大限に生かされていることだし、地域社会に住む人間が生き生きと生活していることである。東南アジアの街で、家並みや道路は貧しいスラムでも、生き生きとした目をしている人々を見かける。生活感が充実し、人々が生きていく。

地域社会の個性は、都市景観や自然などを美しい魅力あるものにしてゆくだけではなく、そこに住む人々が生き生きとしていなければならない。住む人々が、自分たちの地域を愛していなければならない。美しい街をつくるのは、人々にそういう気をおこさせる効果がある。

美しい街には美しい子供等が住むであろう。そして美しい目をした人々の住む街は、魅力的で個性のある街となるであろう。

地域の個性とは、死んだ化石ではなく、日常の中でも生き生きと動いているものなのである。